

---

# それぞれの道、繋がる道

アクベンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それぞれの道、繋がる道

### 【Nコード】

N8394L

### 【作者名】

アクベンス

### 【あらすじ】

昔、大好きな人がいた。

その人は私を闇から光へ誘ってくれて、私にとって無二の親友だった。

その彼女と逢えなくなって久しく経つが、元気になっているだろうか？  
作者の妄想による十六夜咲夜の追憶劇をお楽しみください。

## 前編（前書き）

昔何処かで聞いた咲夜と蓮子知り合い説を妄想で広げてみました。よってオリ設定が満載なので、ありえないとは思いますが決してこの小説内の内容を信じない様お願いします。

あと、今作品は前・中・後の3部作を予定しています。それではどうぞ。

## 前編

「綺麗な月ね、咲夜」

テラスで紅茶を飲みながら月を眺めていたお嬢様が、隣で控えていた私に向けて呟いた。

「そうですね、綺麗な……月です」

お嬢様の言葉をそう返しながら、空に浮かぶ月を眺める。

月を見る度にあの頃を思い出すのは、それだけ強烈な記憶だからだろうか。

「咲夜？」

私はお嬢様の呼ぶ声に気付いて視線を下に向ける。

いつの間にかお嬢様は月ではなく私を見ていた。

「なんででしょうか？」

「何を考えていたの？」

「……いえ、少し昔を思い出しておりました」

私の言葉にお嬢様はそう、と呟いて俯いてしまいました。

あの時と同じ……悲しそうに。

~~~~~

私は元々外の世界で生まれ育った。

しかし外の世界と言っても裏社会に生きる家庭で、私の家族は両親に兄が数人という構成であつた。

何故兄妹の数がはつきりしないのかといえば、既に何人かいなかったと聞かされたからだつた。

私はその兄弟の中で一番末っ子であり、唯一の女でもあつた。

だからと言って何かが変わる訳でもなく、私も兄達と同じく裏社会を生きる為の術を教わつたのだが、私は家族から避けられていた。

何故なら私が触れた物の時間が止まる事があつたからだ。

当時の私にはその能力の制御など出来るはずもなく、時折部屋とい

う空間の時間を止めてしまったりしていた。

その為家族には危険視され、距離を置かれるようになった。

……まあ、避けられていたのはそれだけではなかったのだが。

とにかくそんな環境で育った私は、義務教育で通っていた学校でも友達など出来ることも作ることもしなかった。

クラスメートに陰口を言われてもいじめを受けても無視。そうしていつしか誰も私に関わろうとしなくなった、教師でさえも。

しかし、そんな私が中学に入った頃に転機が訪れた。

それは中学に入って一週間が経った頃だったか、私が一人で給食を食べていた時の事だった。

「あのさ」

誰かが誰かを呼ぶ声がしたが、それを私は自分に向けられた物ではないと決めつけていた。

なので私は視線を下へ向けたまま黙々と食べ続ける。

「あのー聞こえてる？」

再び呼ぶ声。しかもさっきより自分の近くで聞こえてきた。

私はここでようやくこの声が自分に向けられているのでは？と思った。

そう思ったので頭を上げると、そこには私に微笑みかける一人の少女が立っていた。

およそ私のような暗い女とは縁のなさそうなその少女こそが、私の始まりだった。

濃い茶色の髪と整った顔立ちがその笑顔を際だたせ、私に衝撃を与えていた。

人ってこんなに綺麗に笑えるのか、と。

「やっぱり可愛いじゃん！よし、決まり！今日からあなたとは友達！」

そんな人として少しおかしいな衝撃を受けていた私に追い打ちの如き発言をしてきた。

……可愛い？

誰が？

……私が？

友達？

……彼女と私が？

何で？

……判らない。

私の頭の中は突然の事に混乱を起こし、まるで目が回ったように頭がふわりとなって横へと傾く感覚へと変化していった。

あ……まずい。

これは倒れたな。

何故かそれだけは判り、私は頭部への強い痛みと共に意識を失ったのだった。

~~~~~

「ん……」

私が次に目を開けると、目の前には白い壁……天井？が広がっていた。

「あ、起きた！先生、起きましたよ〜！」

女の子の声が聞こえたのでそちらを向くと、そこには私の意識を一気に覚醒させる存在があった。

「あ、貴女は！？うつ……痛……！」

上半身だけ起こし、彼女に声をかけようとしたところ、右側頭部辺りに鋭い痛みが奔った。

「え？あ……だ、駄目だよ寝てなきゃ！頭を強く打ったんだからさ！」

私が痛み能耐えきれず再び横になると、すぐに白衣を纏った女性が現れ氷水をタオル越しに痛む場所へ置いてくれた。

「倒れた際に隣の席の椅子の角に当たったそうよ。保護者を呼んで病院に行かせるからそれまでそれで我慢してちょうだいね」

私がい、と短く答えると女性は電話をするからと言って部屋から出て行った。

そこまで経つてようやくここが保健室であることを認識した。

「えっとさ……ごめんね」

傍らで椅子に座っている状態の彼女が突然謝ってきた。

「私がびっくりさせたら倒れちゃったんだよね？だからごめん」

確かにびっくりしたのは確かだが、あれは私が勝手に混乱したからであって彼女は悪くない。

謝るのは筋違いというものだ。

「そんなことないわ。あれは……私の過失だから」

同年代との会話というものに慣れていない私は少し緊張しながらも何とか言いたい事を伝えることが出来た。

しかし、彼女は焦ったように首を横に大きく振って

「そんなことあるの！私が急に話しかけたりしなかったら倒れたりなんかしなかったでしょ？だから私が悪いの。判った？」

言いたいことは理解出来たけど、何故それを自ら言い出すのだろうか？

黙っていれば私の過失で済むのに。

「あゝ何かなその不満そうな顔は？」

え……顔に出ていただろうか？

これでも裏に手を染める者としてポーカーフェイスには多少自信がある。

いや、さっきから怪しくはあるけど。

「顔に……出てたかしら？」

機嫌を伺いながら尋ねる。

忘れかけていたが、相手を不愉快にさせるのは仕事上有ってはならないことなのだ。

仕事中でないにしろそれは同じ。

「うつん、ほんと顔には出てなかったよ。まあ、少し大きく目が開いてたりはしてたけどね。逆に顔に出てないから不機嫌そうに見えるだけ」

「……そう」

なんというか、とても不思議な子。

明朗闊達でありながら思慮深い印象を与えるなんて。

しかもこんな私に、いきなり友達になってたの……あ。

「あ、あの……」

「へ？あ、何？」

「その、さっきの友達って……」

私がそこまで言うとは思議そうな顔で聞いていた彼女がにこつと笑いかけてくる。

「うん、今日から私達は友達ね。あ、そういやまだ名前言ってなかった。私は宇佐見蓮子。よろしくね」

宇佐見蓮子と名乗った少女を見る。

友達……この子と、友達。

「……いいの？」

自分でも驚いた。

気付いたらそう言葉にしていたからだ。

「いいも何もあんたみたいな可愛い子となら大歓迎だよ。ね？だから友達になろう」

優しい微笑み。

こんな優しさに今まで触れたことがない。  
いいのだろうか。

こんな夢の様なことを素直に受け入れて。

……いや、良くない。

私は裏の人間。

私に関わればこの少女は不幸になる。

だから、駄目。

「駄目よ」

「え？」

「私は……貴女を不幸にするから」

これでいい。

凄く、本当に凄く魅力的ではあるけど、彼女の為だから……正しい

はずだ。

「私が不幸になるから友達になれないって？」

「そうよ」

「なんであんなにそう決めつけられなきゃいけないの？不幸かどうかなんてあんたの基準で決まるものじゃないわ、私が決めるの。だから私と友達になれるの。判った？」

私は啞然としていた。

彼女が不幸になるのは必然であると確信しているからこそ言ったのに、自分で決めると跳ね返された。

なんて自分勝手な子なのだろう。

私は今まで感じたことのない何かを、知らぬが故に抑えきれなかった。

それが私の、人生最初の怒りというものだった。

「貴女は！！」

「えっ？」

私の急な態度の変化に驚いたらしく、彼女はポカンとしているが私は気にすることなく続ける。

「貴女はなんて自分勝手な人間なの！私は貴女を思ってるのに、この分からず屋！」

私は流れるように言葉をぶつけると彼女も流石にカチンときたのか、顔を真っ赤にして反論してきた。

「何よそれ！漫画か何かみたいなこと言ってるあんたにだけは言われたくないわね！この意気地無し！」

私は寝ているのに耐えられず起き上がったが、その際に頭痛と頭にあった氷水をベッドに落としてしまう。が、気にすることなく狂ったように叫んでいた。

「漫画か何かだって？ふざけないで！現実を目を向けてないのはそっちじゃない！温い表の世界で生きてきた温室育ち風情が意気地無し呼ばわりしないで！」

「え？」

「あつ……」

言ってから気付いた。

今、私は自分の素性をバラすような言い方をしてしまった。体全身が急激に冷えていくのがわかる。嫌な汗が止まらない。どんな理由であれ他人に話すのはタブー。

言った場合は……相手を殺すしかない。

「まさかあなた……」

「それ以上言えば……死ぬことになるわ」

私は取り出した折り畳み式のナイフを彼女の首筋に突きつける。私とて殺したくはない。

そもそも私はまだ人を『殺したことがない』のだ。

「そっか、だからなんだ」

何かを突きつけられているのは判っているはずだが、それにしてはやけに落ち着いていた。

「何が……だからなのかしら？」

一応仕事モードに入った私は冷静かつ、はっきりとした口調で尋ねた。

「ううん、大したことじゃないんだけどね。あなたは他の人より辛くて暗くて寂しい場所を知ってるから、そんなに優しいんだなって思っただけ」

また、頭が混乱し始める。

優しい？……私が？

「何を……馬鹿な」

私の言葉に耳を貸さず、一人納得した様子の彼女は

「うん、やっぱりあなたとはいい友達になれそう」

と言ってきた。

今日何度も聞いたその友達という言葉聞いて、私は何故かナイフを向けるのを止めた。

そしてそれは私の中で積み上げてきた何かが崩された瞬間でもあった。

だから一言、私はこう呟いた。

「私の完敗よ」

それはつまり、私の友達宣言だった。

## 前編（後書き）

前編終了です。

正直少し咲夜の地の文が男口調臭い気もしますが、如何でしたでしょうか？

次回は友人となった2人の楽しい日々を書けたらと思います。

ちなみにこれは1年くらい前に思いつきで書いた物で、一度この先もある程度書いたのですが現在停滞しています。

よって次回更新は未定ですが、再びこれを読み返して少し思いついたのでもしかしたら近い内に更新するかもです。

それではまた次回、或いはネギまの方でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8394/>

---

それぞれの道、繋がる道

2010年10月11日05時43分発行